

訪 探 市 吹 笛

第54回

笛吹市の史跡⑬ 牛居沢窯跡

今回の笛吹市探訪では、境川町にある「牛居沢窯跡(うしいざわかまあと)」について紹介します。

古墳時代の土器は、土師器(はじき)と須恵器(すえき)に分けられます。土師器は、弥生土器からの流れを受けた土器で、500度から900度の素焼きで作られていました。それに対し、5世紀前半に朝鮮半島から伝わった須恵器は、ロク口で形を作り、1200度の高温の窯の中で焼くという当時の先端技術を用いた焼き物でした。

赤褐色(せきかつしよく)や暗褐色の土師器に対し、須恵器は灰色で、釉(うわぐすり)をかけたように見える「自然釉しぜんゆう」と呼ばれるものも、焼いた時の温度が高いことによりです。



窯で焼かれた須恵器

また、須恵器は丈夫で水が漏れにくいという長所がある反面、直接火にかけると割れてしまうため、煮炊きには土師器が用いられました。さらに、須恵器は、土師器と比べると地域差が少ないため、製品の形態や技法の移り変わりによって遺跡の年代を決める重要な役割を果たしています。

当初、須恵器は大阪南部で大規模に生産されましたが、徐々に地方へも広がってきました。現時点での山梨県最古の須恵器の窯は、境川町にある7世紀前後に作られた下向(しもむこう)窯跡と言われており、窯の中で溶けたと思われる須恵器の破片などが見つかっています。過去の確認調査では、確認することができなかったことから、すでに窯跡は壊されてしまったようです。

牛居沢(うしいざわ)窯跡は、下向窯跡よりやや新しい7世紀中頃のものと考えられています。この窯跡では、昭和62年に発掘調査が行われ、曽根丘陵のすその南西斜面に、3基が並んで見つかりました。この3基の窯は、長さ約3メートル、幅1・3メートル前後の小型の登り窯です。

3基とも、同じ頃に使用されたものと考えられています。一つの窯から7世紀前後の須恵器が見つかっているため、ここで初めて須恵器が焼かれたのは、数十年程度かのぼる可能性もあります。ただし、小規模な窯跡だったため、作られた須恵器もそ



発掘調査風景

れほど多くなかったと思われます。

7世紀後半から奈良時代までには、甲斐市の天狗沢瓦窯(てんぐさわがよう)跡や甲府市の川田瓦窯跡で、瓦と須恵器と一緒に焼かれていることが分かっていますが、牛居沢窯跡は、現存する県内最古の須恵器の窯跡として、昭和63年、旧境川村の文化財に指定されました。

このほかにも、この地域の傾斜地には、まだ多くの窯が発見されずに、眠っていると思われる。もし皆さんが斜面から焼けた土や土器を見つけた場合には、教育委員会文化財課までご一報ください。